

第45回全日本教育工学研究協議会全国大会 「島根大会」開催に向けて



島根大会実行委員会委員長／島根大学 准教授 深見 俊崇

第45回全日本教育工学研究協議会全国大会を島根県で開催することができることに大きな喜びを感じるとともに、多大なるご支援、ご協力をいただいた関係者の方々に深く御礼を申し上げます。本大会は、授業公開が雲南市、全体会・研究発表等が松江市と2つの地域で行われることが特色です。

大会のテーマは、「日常的なICT活用が拓くクリエイティブな学びを目指して」としました。これまで全国大会が開催されてきた地域と比べ、島根県は、教育の情報化の推進に関して先導的な地域ではありません。むしろ、これからICT環境が整備されていく地域と言えるでしょう。それゆえ、全国大会を迎えるにあたって、公開で見せる「ICT活用のためのICT活用」ではなく、児童・生徒が日常的にICTを活用できるような指導や環境整備の基本方針を共有できる場にしようとして共通理解を図って参りました。そして、新しい学習指導要領が目指す「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、「深い学び」につながる題材や活動を起点に、児童・生徒が心から考えたい、取り組みたいと思う「主体的な学び」、そして仲間・教師・書籍・専門家等との「対話的な学び」が引き出される必要があります。このような学びを象徴するのが大会テーマに掲げた「クリエイティブな学び」です。公開授業校である木次小学校、斐伊小学校、寺領小学校、西日登小学校、木次中学校、島根県立三刀屋高等学校の6校は、大会テーマをいかに実現するかの研究協議を重ねて参りました。本大会は、その成果を全国の教育関係者の皆様にお見せし、忌憚のないご意見やご助言をいただける好機であります。是非とも各校の公開授業をご覧いただき、研究協議への積極的な参加をお願いしたいと思います。

本大会では100件を超える研究発表がエントリーされております。研究発表では、様々な知見や情報の交流、そして活発で実りある質疑応答から発表者も聴講者も学びが深まり、「教育の情報化」の発展につながる場となることを期待しております。さらに、教育関連団体、NHK、教育関連企業が主催するワークショップも8つ開催されます。プログラミング教育、情報活用能力の育成、ICTを活用した授業づくり、テクノロジーを活用した授業改善等、いずれも価値ある学習機会になることは間違いのないでしょう。

また、大会第1日目のパネルディスカッションでは、各校の指導にあたってきた研究者や指導主事がそれぞれの実践を踏まえ、大会テーマをめぐる今後の「教育の情報化」のあり方を議論します。そして、大会2日目の最後には、「2030年への展望を見据える」と題したトークセッションを設定しました。JAETの研究・実践をリードしてこられたJAET会長の野中陽一先生、東北大学大学院教授の堀田龍也先生、大阪教育大学大学院教授の木原俊行先生にご登壇いただき、「教育の情報化」に関する近未来の展望について熱く語り合ってください。

最後に、全国各地よりご参加いただきます皆様方に心より御礼申し上げますとともに、本大会が皆様にとって意義深い大会となりますことを祈念し、挨拶とさせていただきます。

2019

vol.3

発行日 2019年10月1日
発行所 日本教育工学協会
発行人 野中陽一
制作協力 株式会社帆風
事務局
〒107-0052
東京都港区赤坂1-9-13
三会堂ビル8階
TEL: 03-5575-0871
FAX: 03-5575-5366
http://www.jaet.jp/

「新時代の学びを支える先端技術活用推進方策（最終まとめ）」について

文部科学省 初等中等教育局 初等中等教育企画課 学びの先端技術活用推進室

文部科学省は本年6月、新時代に求められる教育の在り方や、教育現場でICT環境を基盤とした先端技術や教育ビッグデータを活用する意義と課題を整理し、今後の取組方策をまとめた「新時代の学びを支える先端技術活用推進方策（最終まとめ）」を公表しました。

1. 新時代に求められる教育

IoTやAI等の技術革新によりもたらされる「Society5.0」の時代では、飛躍的な知の発見・創造など新たな社会を牽引する能力や、その前提となる読解力、数学的思考力等の基礎学力が求められます。

また、不登校等で他の子供とともに学習するのが困難な子供や、発達障害の可能性のある子供、日本語指導が必要な子供等、子供の多様化に正面から向き合うことがますます重要になっています。

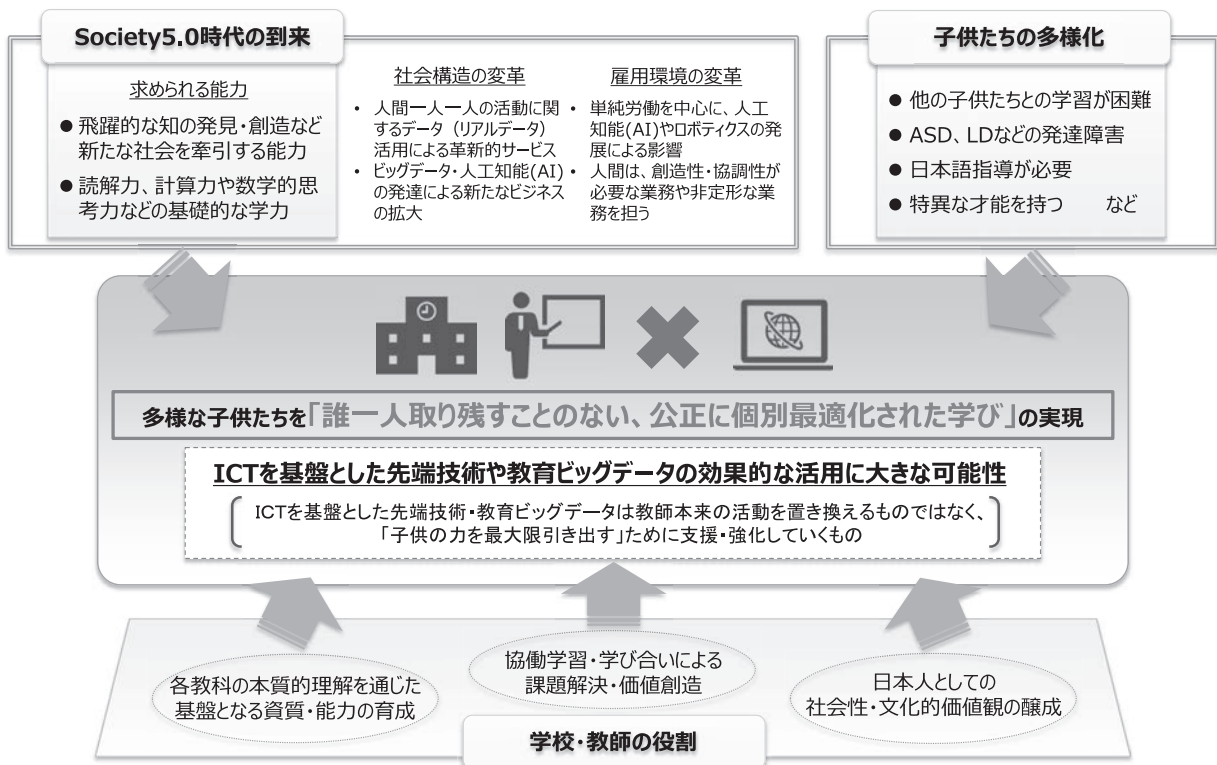
多様な子供を誰一人取り残さず、一人一人の個性や置かれた状況に最適な学びを可能にする、「公正に個別最適化された学び」を実現することが重要です。

2. 先端技術や教育ビッグデータの活用の意義

公正に個別最適化された学びを実現する上で、ICT環境を基盤とした先端技術や教育ビッグデータの活用には大きな可能性があります。その具体的な効果としては①学びにおける時間・距離などの制約を取り払う、②個別に最適で効果的な学びや支援、③可視化が難しかった学びの知見の共有やこれまでにない知見の生成、④校務の効率化、といった事が期待できます。

学校現場での課題を克服し新時代の教育の実現を進めるため、最終まとめでは、先端技術や教育ビッ

新時代における先端技術を効果的に活用した学びの在り方 ～新時代に求められる教育～



データの効果的な活用の在り方と、その前提となるICT環境整備について方策をまとめました。

3. 先端技術の効果的な活用

技術の進展は日進月歩であり、遠隔教育やデジタル教科書・教材を始め、子供の学びや教師を支援する様々な製品が開発されています。最終まとめでは、現時点でのこれらのツールを分類し、それぞれの機能、効果と留意点をまとめ、先端技術の効果的な活用の基本的考え方を整理しています。

今後、文部科学省においては、先端技術の活用に係る実証事業の結果等を参考にしながら、令和2年度内をめどに「学校現場における先端技術利活用ガイドライン」を策定することとしています。

4. 教育ビッグデータの活用

技術の発展が、これまで取得困難だったデータを、個人の学習履歴等として継続的に収集・蓄積することを可能にしています。教育ビッグデータには様々な可能性があり、例えば海外では教師の授業設計や個別指導、学校評価等にビッグデータが活用されています。

日本でも、近年、様々な主体がデータの収集を行っています。データ項目や使われる用語等が各主体によってまちまちであり、統一するルールがないことから、データの連携や分析が効果的に行われていない状況にあります。

このため、民間企業や有識者等を交えて教育データの標準化に向け検討を行い、令和2年度中に一定の結論を得、ビッグデータの活用を促進することとしています。

5. 基盤となるICT環境の整備

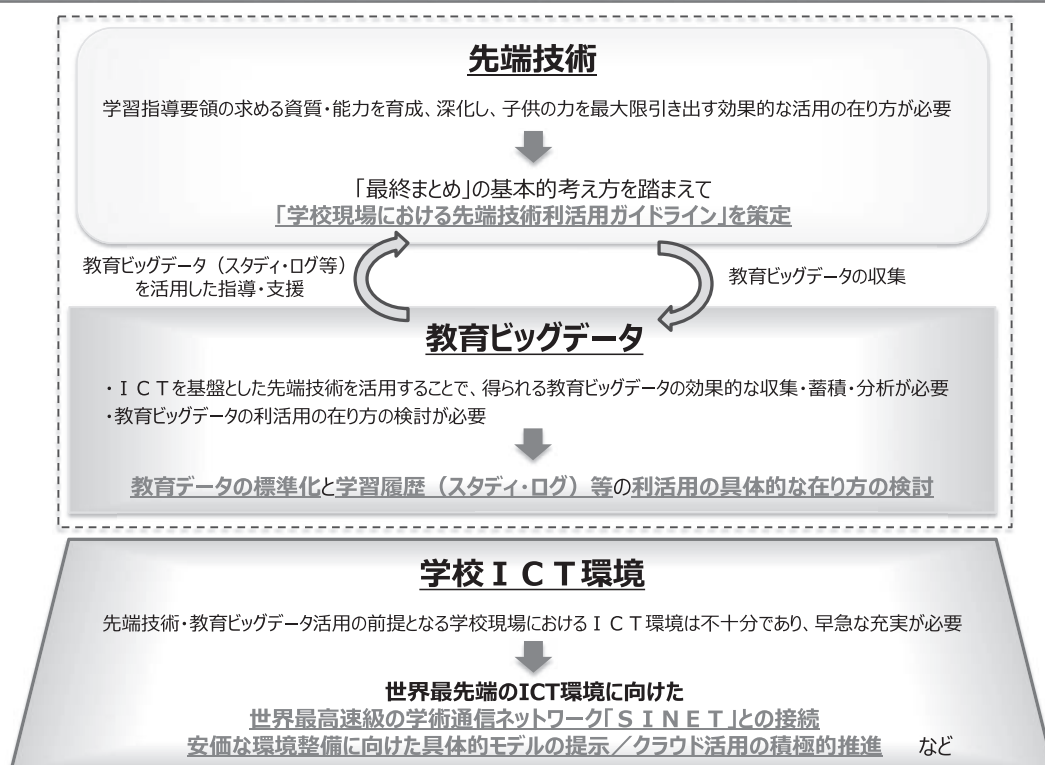
先端技術や教育データの活用には、前提としてICTの基盤が整っている必要があります。文房具と同様、教育現場において不可欠です。一方で、学校のICT環境の脆弱さや地域間格差は危機的な状況です。

このため文部科学省では、クラウドの活用や具体的な整備モデルの提示等により安価で使いやすいICT環境整備を促進し、世界最先端のICT環境の実現に向け、令和元年度内にロードマップを策定することとしています。

※最終まとめ本体はこちら（文部科学省HP）

http://www.mext.go.jp/a_menu/other/1411332.htm

先端技術・教育ビッグデータの効果的な活用とICT環境の整備について取組むべき方策（全体像）



学校情報化認定の実施状況と 認定に向けてのアドバイス



JAET理事・学校情報化認定委員会幹事／大阪教育大学 准教授 寺嶋 浩介

1. 学校情報化認定の状況

学校情報化認定とは、本協会が教育の情報化の推進を支援するために、学校情報化診断システムを活用して、情報化の状況を自己評価し、総合的に情報化を進めた学校（小学校、中学校、高等学校）を認定する仕組みです。認定を受けた学校については、教育の情報化に力を入れており、それが一定の水準を満たしていることがわかるので、対外的な実績として報告したり、今後の研究推進のためのアピールとして使用したりすることができます。

学校情報化認定には、「優良校」、「先進校（優良校の中から、特に優れた取組を行っている学校）」、「先進地域（優良校として認定された学校が、一定の割合を達した地域）」という枠組みがあります。一旦認定されても、認定期間が終了すると、再認定を受けていただくことになります。

2. 学校情報化先進校

学校情報化先進校は、学校情報化優良校として認定された学校のうち、「教科指導におけるICT活用」「情報教育」「校務の情報化」のいずれかのカテゴリにおいて、特に優れた先進的な取組を行っている学校を表彰します。毎年数校しか選ばれず、大変競争が激しいものとなっています。先進校認定のためには、電子システムによる登録だけではなく、認定委員会委員の訪問も受け、その内容を確認されます。2019年度についてはすでに審査が終了しており、優良校18校の応募の中から、以下の学校に決定しました。

「教科指導におけるICT活用」カテゴリ

- ・鹿児島市立山下小学校
- ・大阪市立堀江小学校

「情報教育」カテゴリ

- ・広島市立藤の木小学校
- ・大阪市立阿倍野小学校

「校務の情報化」カテゴリ

- ・徳島県東みよし町立足代小学校

この中で、大阪市立阿倍野小学校は、昨年度「教科指導におけるICT活用」カテゴリにおいて認定さ

れましたが、今年度は「情報教育」カテゴリにおいて認定されています。以上の学校の選定理由については、Webページに記されておりますので御覧ください。

3. 優良校に応募するために

優良校に認定されるためには、本協会が提示している「学校情報化チェックリスト」によって、自校の学校情報化の取組を把握する必要があります。過去の優良校がどのように自己診断しているかを参考にしながら、自校の取組を評価し、強みを発見しつつ改善点を明確にしましょう。

学校情報化診断システムの入力にあたっては当たり前のことですが、チェックリストには正直に答えましょう。優良校の審査は、「学校情報化チェックリストのすべての項目の平均が2以上であること」「各項目のレベルが1以上（0の項目がないこと）」という要件が満たされれば、よいものです。たまに、チェックリストが1なのにも関わらず、今後の対応に関する記述が抜けているものがよくあります。その対応についても具体的に記述することが求められますのでご注意ください。

その他、「情報化の取組による学校（教員・児童生徒）の変容」についての記述が不足している申請校も見られます。もちろん数字でわかるようなエビデンスがあれば良いとは思いますが、そうでなくても、具体的にどの点に変容があるか、なぜそう考えるかなどを明確にすれば良いと思われま

す。また、アップロードしてもらうファイルとして、「情報活用能力や情報モラル、情報機器の操作スキルに関する指導計画等（最低一つ）」があります。ICTを活用した授業例はその他写真等で把握することになっていますので、児童・生徒の能力をどのように育てようとしているのかについての資料があると良いでしょう。

以下では優良校として2校に学校としての工夫を寄稿していただきました。

茨田南流ICT活用術

大阪市立茨田南小学校 ICT教育担当 清水 健吾

本校は、タブレット端末40台、画像転送装置4台を保有する一般的なICT環境の小学校です。その様な中で、研修や環境整備を行うことで、活用回数や活用の質が高まり、2018年7月に学校情報化認定の優良校に認定されました。このために最初に取り組んだことは、教員にICTを使ってもらうための接続方法や使用例等の研修です。研修後のアフターフォローやトラブル時の対処なども個別に行いました。また、教員からの要望を聞き環境面の整備も行いました。校内の予算で、持ち運び用のカートやUSB接続できるマウス・キーボード、タブレット端末を固定するスタンド等を購入しました。

次に、年に2回ICT支援員が来校する週をICT WEEKと設定して、全てのクラスでその週にタブレット端末を活用した授業を実施してもらいました。放課後の研修会では、実践した内容の交流や検討を行い教員の活用の幅を広げることができました。

さらに、2018年度より、ICT活用を校内研究の主題とし授業研究も行ってきました。ICTをどのように使ったらよいか、試行錯誤しながら授業づくりを学校全体で取り組むことにより、どの学年もICT活用のよさを感じ、少しずつ身近なものとして活用できるようになってきています。



写真1 まちたんけんの発表



写真2 跳び箱運動

例えば、2年生の生活科「まちたんけん」では、インタビューに行く際にタブレット端末を持っていき、写真や動画を撮影し、発表ノートにまとめ、全体で発表会を行いました(写真1)。また、6年生の体育科「跳び箱運動」では、遅延アプリを活用し、自分のフォームを確認し、アドバイスをしあいながら技の向上に繋がりました(写真2)。今後は、学校全体でのプログラミング学習にもチャレンジしていきたいと考えています。

情報活用能力を身に付けた子どもの育成をめざして

福岡県うきは市立千年小学校 校長 袋野 美幸

うきは市は、すべての小・中学校にWi-Fi環境や児童・生徒用タブレット端末などのICT環境が整備され、各学校でICTを活用した授業改善が行われています。そうした中、本校は、2018年3月に「学校情報化優良校」の認定を受けることができました。

本校では、2017年度より福岡県重点課題の研究指定・委嘱事業を受け、「情報活用能力を身に付けた子どもの育成」に取り組んで参りました。情報活用能力の3つの観点から、それぞれ「教科におけるICT活用」「プログラミング学習」「情報モラル教育」につながると考え、授業づくりの実践を積み上げているところです。

「教科におけるICT活用」では、1時間の問題解決学習をより充実させるためにその過程でICT機器を利用します(写真1)。また、「プログラミング学習」では、ビジュアルプログラミングやロボットプログラミングを行う授業に取り組んでいます(写真2・3)。「情報モラル教育」では、情報モラルに関する指導を情報活用能力の育成の基盤ととらえ、問題解決の過程でICT機器を用いています。

そして、情報モラルを日常のモラルと情報安全教育という2点からとらえ、授業づくりを行っています。

ICTを活用することの良さを教職員は実感しており、児童の学習に対する意欲が高まり、考えの表現・交流することについての伸びにつながっています。今後も「情報活用能力を身に付けた子どもの育成」をめざして日々の授業を積み上げていきます。



写真1 教科におけるICT活用



写真2 ビジュアルプログラミング



写真3 ロボットプログラミング

開催報告 かがしま維新！ 学習指導要領改訂に対応した学びの姿



JAET常任理事／鹿児島大学大学院 准教授 山本 朋弘

1. はじめに

令和元年8月26日、鹿児島市の中央公民館で「教育の情報化実践セミナー in鹿児島」を開催しました。今回のセミナーのテーマは、「かがしま維新！学習指導要領改訂に対応した学びの姿」です。学習指導要領が改訂され、小中学校において新教育課程がスタートし、今後は児童生徒の学習の基盤となる資質・能力の育成が求められています。

今回のセミナーでは、授業デザインとICT活用、情報教育・プログラミング教育など、学習指導要領の改訂に対応した学びの姿をテーマにした実践的な内容を実施しました。本稿では、基調講演、実践発表、総括の概要を報告します。

セミナーの内容は、和歌山大学大学院の豊田充崇教授による趣旨説明、東北大学大学院の堀田龍也教授による基調講演、鹿児島県内の幼稚園と小中学校からの実践を報告いただき、それらを踏まえ、大阪教育大学大学院の木原俊行教授に今後の方向性について総括していただきました。

2. 基調講演

東北大学大学院の堀田龍也教授に、「学習の基盤となる資質・能力の育成」という題目で講演いただきました（写真1）。

学習指導要領改訂や教育の情報化の変遷をたどりながら、ICT教育環境を構築していくことが必要であり、学校が新たな時代への対応を展開していくことの重要性について指摘されました。また、情報活用能力等の資質能力の育成では、コンピテンシーベースでの捉え方が重要であり、子供たちがどのような学びをしているかを明確にして指導することが大切であると説明されました。

さらに、教育の情報化の視点から、6月に交付・施行された「学校教育の情報化の推進に関する法律」について解説し、各自治体がこれからの教育の情報化をどのように推進すればよいかについて話されました。デジタル教科書の活用やプログラミング教育、遠隔授業など、先導的な事例を示しながら、各学校

が事例を共有し、これからの教育課題の解決に向けた取組の方向性について具体的に解説されました。



写真1 堀田龍也教授による基調講演

3. 実践報告

今回のセミナーでは、「授業デザインとICT活用」と「情報教育・プログラミング教育」の2分科会に分かれて、それぞれ3つの実践を報告しました。

「授業デザインとICT活用」では、鹿児島市立学習情報センターの川原省吾指導主事の進行で、幼稚園、小学校、中学校での活用事例を報告いただきました（写真2）。実物投影機を用いた日常的な活用から、遠隔授業による協働学習まで、幅広い活用事例を共有することができました。



写真2 分科会1での発表風景

「情報教育・プログラミング教育」では、鹿児島県総合教育センターの木田博研究主事の進行で、小学校と中学校の実践事例を報告いただきました。情報モラル教育から小学校プログラミング教育まで、幅

広い研究分野から先行的に実践した事例を参加者の中で共有することができました。

4. グループワーク

分科会後半のグループワークでは、Googleフォームを活用して、分科会前半の事例発表についての質問や意見を出し合いました。2次元バーコードを印刷した用紙を配布して、スマホやタブレット端末で読み取ってもらい、Googleフォーム上のアンケートサイトに書き込んでもらいました。さらに深く聞いてみたいことや、十分理解できなかったことを自由に出してもらい、答えられる範囲で回答してもらいました。

その後、グループに分かれて意見交換を行って、実践報告の成果と課題をまとめました。どのグループも熱心に議論していて、話し合う場面での学びの深まりを感じることができました。

最後に、分科会講師の先生方に、実践のポイントや今後の展開に対するアドバイスをいただきました(写真3)。

「授業デザインとICT活用」では、和歌山大学大学院の豊田充崇教授と鹿児島大学大学院の廣瀬真琴教授にまとめていただきました。

「情報教育・プログラミング教育」では、山本(筆者)と、常葉大学の佐藤和紀講師による研究の評価と価値付けが展開されました。

講師による的確なアドバイスによって、実践者が今後さらに実践が深めていくだけでなく、参加者全員が今後の実践に役立つことができる内容となりました。



写真3 分科会での助言の様子

5. 総括

本セミナーの成果について、大阪教育大学大学院の木原俊行教授に以下のようにまとめていただきました(写真4)。

- ・堀田教授の基調講演では、スピード感をもって教育環境を整えていかないといけないという言葉が心に残った。
- ・鹿児島県内の環境整備は全体的に良好であり、次年度の全国大会の開催に向けて、追い風は吹いている。
- ・情報活用能力の育成では、カリキュラム・マネジメントを機能させていくことが重要である。
- ・分科会での実践発表では、社会科における主体的・対話的で深い学びのための遠隔授業、プログラミング教育でのカリキュラム・マネジメント等の学校現場において興味深い内容であった。



写真4 木原俊行教授による総括の様子

6. おわりに

本セミナーは、来年度の11月6日、7日に開催予定のJAET全国大会のプレセミナーとしての位置づけでした。企業展示23社、参加者・登壇者等を含めると参加者が約300名となり、これまでの参加者数をはるかに超え、盛会に終えることができました。最後に、本セミナーの開催・運営にご協力いただいた関係各所の皆様に感謝申し上げます。

次のページでは、2つの分科会に分かれて、6名の先生方から発表された実践報告の内容をご紹介します。

【実践報告1】授業デザインとICT活用

進行 鹿児島市学習情報センター指導主事 川原 省吾
児童生徒の主体的な学習や対話的な学習を行う際に、学習目的を明確にした授業のデザインを行うと同時に、その目的を達成するためのICT活用を考慮した授業計画をすると、より効果的に主体的で対話的な学習を計画することができます。どのような授業を計画し、デザインするかについて、次の3つの実践報告がなされました（写真5）。

(1) 遠隔共同学習の可能性

鹿児島市立鹿児島玉龍中学校 教諭 上白石 修

離島と本土の小規模校を結んだ学校間の交流をはじめとして、カナダの日本人教師と生徒を結びチャットやWeb会議を行った授業、メキシコとつなぎ時差や異文化の体験を行う授業など、様々な遠隔授業の実践を行ってきました。

昨年度の実践では、「持続可能な地域の活性化プラン作り」をテーマに、メキシコの大学教授や日本の実践者と交流しました。生徒が考えた鹿児島の活性化プランを専門家の意見を参考にしながら練り上げ、より具体的な活性化プランを完成させることができました。ジグソー学習の形態で授業を進め、生徒は意見をそれぞれグループに持ち帰り、議論を行います。このような実践を通じた直接交流によって、生徒に考え方の多様性や専門性の高まりが見られました。生徒と交流先の人をつなげるコーディネータとしての力量や、教師としての専門性を高める機会となったことが成果としてあげられます。

(2) ICTを活用した授業の実践

霧島市立国分西小学校 教諭 立山 唯人

本校においては、日常的に書画カメラを活用した実践を行っています。今回は主に国語と算数の授業内での活用事例を報告します。

教師の活用では、児童に分かりやすく理解してもらうために、辞書や定規の使い方を拡大表示しました。児童の活用では、児童がノートや具体物を提示しながら説明したことで、より効果的な活用が進みました。また、2年生での実践は、学習内容の情報を共有するため、6年生での実践では、発表したり、表現したりするために児童が活用することを意識して活用させています。

ICTを活用することにより、児童の学習意欲が向

上し、発表の場面では、わかりやすさや説明の順序を意識した発表が見られるようになりました。課題として、ICTの使用場面が固定化される傾向にあるので、児童が自ら考え、多様な場面で活用できるようにしていきたいと思っています。

(3) 授業（保育）デザインとICT活用

学校法人 白石学園幼保連携型認定こども園

辻ヶ丘幼稚園 主幹保育教諭 新留 明子

辻ヶ丘幼稚園では、小学校入学前の子供たちの教育活動においてICT活用を積極的に行っています。その中で、感動体験につながるICT活用を目指して、「感動から生まれる豊かな発想、意欲的な活動を育むデジタル教材の利活用」を研究テーマとして、実践を行ってきました。

年少組（3歳児）の園児はミニトマトの栽培を行っていますが、その導入で、ミニトマトが大きくなる様子を、大型テレビを使って映像で見せ、生長を見通せるようにしました。年中組（4歳児）では、カブトムシを飼う活動において、NHK for Schoolのデジタルコンテンツを使い、興味・関心を高めることができました。年長組（5歳児）では、折り紙制作を行う際に、折る場所やのり付けの位置を確認するために、実物投影機を活用しました。折り紙を折るポイントなどを園児が発表する際にも意識して使わせています。成果として、直接体験を深めるためにICTを活用したことで、園児は興味・関心を高め、感動体験を味わうことができました。

（報告 川原）



写真5 実践報告1の様子

【実践報告2】情報教育・プログラミング教育

進行 鹿児島県総合教育センター研究主事 木田 博
第2分科会では、中学校技術・家庭科における協働学習、ICT活用による指導法改善、保護者とともに
行う情報モラル教育、そして小学校プログラミング教育に関する実践報告と、それに対するグループ
ワークが行われました（写真6）。

(1) 学習の基盤の育成を図る協働学習～協働して主体的に課題を解決しようとする生徒の育成をめざして～
鹿児島市立西紫原中学校 教諭 竹下 誠
技術・家庭科の学習におけるグループ学習において、すべての生徒が主体的に学習に取り組むことができるようにするために、ジグソー学習やワールドカフェ方式を参考にした学習活動を取り入れた授業実践を行いました。

また、生徒が表計算ソフトやプレゼンテーションソフトを活用し、回路図の作成や修正等を容易にできるように「Learning Sheet」と名付けた自作の教材についても紹介しました。

参加者からは、生徒に学習の基盤となる資質・能力を育成するために、教科担任だけでなく、教科の枠を超えた授業づくりに関する校内の研修体制のあり方について質問が出されるなど、個人の取組をどのように学校全体に広げていくかについて関心が集まったようでした。

(2) 自ら学び、他者と伝え合いながら、考えを深め合う子どもの育成

西之表市立榕城小学校 教諭 森永 崇行
森永教諭は、総合的な学習の時間に位置づけたプログラミング教育について、「福祉」を主題とした探究的な学習の過程に、micro:bitを使ったおもちゃ作りを取り入れました。児童がおもちゃを遊ぶ対象となる2年生にどうしたら楽しんでもらえるかを話し合いながら、考えを深めていくという授業実践について報告を行いました。

また、Web会議システムを利用して、種子島と鹿児島大学をつなぎ、大学院生によるプログラミング遠隔授業についても紹介しました。

参加者からは、プログラミング教育をどのようにカリキュラムに位置付けていくかということに関する質問が多く出され、学校全体として計画的に実施していくことの重要性について共有したようでした。

(3) 児童と保護者が情報モラル教材を活用して学び合う活動による家庭での情報活用の変容に関する考察

薩摩川内市立隈之城小学校 教諭 下川 恭子
児童だけではなく、保護者と共に情報モラル教材を活用して「親子の学び合い活動」を行うことで、メールやインターネットを行う際の家庭でのルール作りが飛躍的に進んだことが報告されました。

参加者からは、2次元バーコードを利用した保護者に対するアンケートの具体的な内容と方法について質問が出され、今回の実践に加えて、今後、継続的、計画的な実践を行うことで、児童・保護者双方にどのような変容があらわれるかについての分析・成果に期待する声が聞かれました。

（報告 木田）



写真6 実践報告2の様子

メディアとの関わり方を「見直す」習慣を

国際医療福祉大学 講師 鶴田 利郎



1. ゲーム障害・インターネット依存

2019年5月のWHO年次総会の委員会において、ゲーム障害が国際的に疾患として認められることになりました。このゲーム障害は、近年国内においても深刻な社会問題の1つとして挙げられていたインターネット依存と問題点を共有している点が多く、国際疾病分類の改訂版「ICD-11」において、治療が必要な疾患として位置付けられました。

この改訂版では、①ゲームの時間や頻度などを自分でコントロールすることができない、②日常の関心ごとや日々の活動よりもゲームを優先する、③日常生活に大きな問題が生じてもゲームにのめり込む、というような状態が1年間（重症であればより短期間）続くことをゲーム障害としています。

2. メディアとの関わり方を振り返る

ゲーム障害やインターネット依存を未然に予防するために日常からできることの一つは、これらとの関わり方を振り返り、見直すことです。例えば、起床から就寝までの食事や勉強の時間と共に、ゲームやインターネットを何時から何時まで、どういう目的で利用したかを記録する方法があります。その時の体調や気持ちをあわせて書くことも効果的です。

また近年では、ソーシャルメディアの利用も急速に広がってきているため、SNS上での友達とのメッセージのやりとりを「誰かを傷つける表現や誤解を生むような表現をしていなかったか」、「相手がどのようなつもりでそのメッセージを送ってきたのかを考えながら受け取ることができていたか」といった観点から振り返ってみることも大切です。

3. R-PDCAサイクルを用いた見直す行動の習慣化

このように自身の行動を振り返ることができれば、次はそれを踏まえて行動改善に向けて取り組んでいきます。そこで有効と考えられる活動がR-PDCAサイクルです（図）。これは、従来企業内プロジェクトのマネジメントの手法として作られた経営モデルで

あるPDCAサイクルの考え方を基本とし、Planの検討前に行う、先に挙げた振り返りなどのResearchの重要性を強調したものです。（P）の前に（R）を置くことによって、（P）がより実態に即したものになります。そのため、児童生徒の学習や生活習慣を自己改善するための手法としても効果的です（田中、2009）。

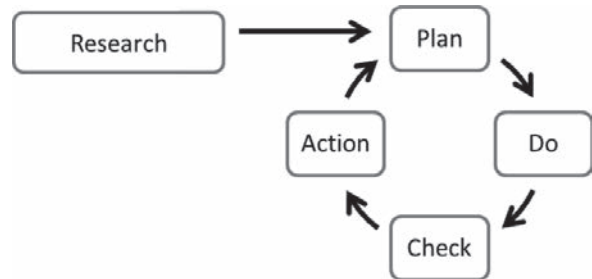


図 R-PDCAサイクル

具体的には、先の振り返り（R）を踏まえ、自身に必要な行動目標（P）を考え、意識して行動するよう取りまします（D）。その後、目標を意識した取組に対する自己評価を行い（C）、それを踏まえて新たな行動目標を設定し、さらなる改善を促します（A）。これを繰り返すことでメディアとの関わり方の「見直し」を習慣にしていくのです。

人々を取り巻くメディアの環境は日々変化し、メディアがなければ生活が不自由になるほどです。メディアは、人々に良い影響を与えることもあれば、悪い影響を与えることもあるように、大きな影響力をもっています。だからこそ、メディアとの関わり方を見直し、望ましい行動のあり方を常に考える習慣を育てていくことが必要ではないでしょうか。

参考文献

田中博之（2009）自己マネジメント力が子どもの総合学力を伸ばす。授業と家庭学習のリンクが子どもの学力を伸ばす、Benesse教育研究開発センター、東京、pp.246-257



「教育の情報化」実践セミナー2020 in 上越のご案内

8月に開催した「『教育の情報化』実践セミナー2019 in 鹿児島」に続き、下記の通り開催いたします。詳細はJAETホームページに掲載いたしますので、ぜひともご参加ください。

テーマ：(仮題) 完全実施までわずか2ヶ月！学校の備えは万全ですか？

「プログラミング教育 待ったなし」

日時：2020年2月1日(土) 10:00～16:00(受付9:30)(予定)

会場：上越教育大学 学校教育実践研究センター
(新潟県上越市西城町1-7-2)

主催：日本教育工学協会(JAET)、上越情報教育研究会(JCOM)

後援：上越市教育委員会(予定)

参加対象者：小中高等学校・特別支援学校教員及び教育関係者、大学研究者、学生、教育関連企業など

参加費：無料

プログラム：プログラミング教育の完全実施が迫ってきた今、改めて学校の準備態勢を確認する意味を込めたセミナーです。プログラミング教育のこれまでの経緯やその意義、想定されるカリキュラムの構築や実践時の手立て等、この1日でプログラミング教育実施にむけた備えが整う日としたいと考えております。

講師：調整中

2月の「『教育の情報化』実践セミナー in 上越」に続き、3月には、徳島にて開催する予定です。

第46回 全日本教育工学研究協議会全国大会 鹿児島大会 開催予告

日時：2020年11月6日(金)、7日(土)

会場：宝山ホール(鹿児島県鹿児島市山下町5-3)
鹿児島市中央公民館(鹿児島県鹿児島市山下町5-9)

つぶやき

最近、1日のスマホ利用時間を記録しています。機種によって異なりますが、私の場合は、スマホの画面で、設定→アプリと通知→詳細設定→利用時間の順にたどっていくと各アプリの利用時間の記録がグラフとともに表示されます。この原稿を書いている日の実態は、Google Chromeが21分、ショートメッセージが5分、連絡帳が1分未満、電話が1分未満、となっています。何と30分未満です。1か月程度の記録が保存されており、1日平均が約1時間で、青少年の平均利用時間に比べると5分の1程度になります(私の周りには、1日の利用時間が20

時間を超えている依存に近い人もいますが…)。さらに、マイアクティビティというメニューを表示すると、いつ、どこで、どのアプリを使ったかが地図上に表示できる機能もあります。このデータは、どこに保存されているのでしょうか？ いろいろ探っていくと、個人の詳細な行動記録をGAFANAなどの巨大ICT企業が独占しているということが分かってきます。これらの情報を提供するかどうかは自分でコントロールできるので、適切に設定しておきましょう。

(KH)

編集委員

委員長 中橋 雄
委員 原 克彦
〃 長谷川 弘

委員 今野 貴之
〃 福山 創

事務局 渡辺 浩美
〃 秋定 望
制作 西島 将範

デジタル教科書・教材 シリーズ

東京書籍
令和2年度
小学校

デジタル教科書は新しい時代へ

全ての児童に
学ぶよろこびを
授業に新たな
引き出しを



*画像は開発中のものです。

指導者用
デジタル
教科書
(教材)

国語
社会
(5・6年)
算数
理科

指導者用
デジタルブック
(指導書付属)

書写 家庭
社会 保健
(3・4年) 地図 英語
生活 道徳

*社会(3・4年)・地図はデジタルコンテンツ集です。

学習者用
デジタル
教科書

国語 生活
書写 家庭
社会 保健
地図 英語
算数 道徳
理科

学習者用
デジタル
教材

国語 理科
書写 生活
社会 家庭
(5・6年) 算数 道徳

東京書籍が発行する全ての教科書について学習者用デジタル教科書を発行します。

Lentrance ReaderはDAISY教科書に対応する予定です。



東京書籍 教育事業本部 営業部(東京) 〒114-8524 東京都北区堀船2-17-1 Tel:03-5390-7577 Fax:03-5390-7582
(大阪) 〒532-0004 大阪市淀川区西宮原1-4-10 Tel:06-6397-1351 Fax:06-6397-1357
東京書籍ホームページ <https://www.tokyo-shoseki.co.jp> 東書Eネット <https://ten.tokyo-shoseki.co.jp>



Gakuei System

株式会社 **学映システム**

佐賀本店

佐賀県佐賀市鍋島町大字森田 902 番地
TEL 0952-34-5280 FAX 0952-34-5285

こどもの夢をお手伝いします



武雄支店

佐賀県武雄市武雄町大字永島 15877 番地 1
TEL 0954-22-4124 FAX 0954-22-4109

唐津営業所

佐賀県唐津市和多田用尺 12 丁目 39 号
TEL 0955-70-2270 FAX 0955-70-2277

久留米営業所

福岡県久留米市東合川 8 丁目 8 番 21
TEL 0942-41-4315 FAX 0942-41-4317

福岡営業所

福岡県福岡市博多区千代 2 丁目 1 番 15
TEL 092-260-7664 FAX 092-260-7665

沖縄出張所

沖縄県島尻郡与那原町字東浜 81 番 2
TEL 098-917-2707 FAX 098-917-2708



<https://www.gakuei.co.jp>